

サラワク州の現状（前編）

～パームオイルと製紙原料のプランテーション開発にゆれるサラワク先住民～

今年4月、大阪でマレーシア・サラワク州先住民（カヤン族）のジョクさんの話を聞いた。ジョクさんはサラワク州の木材伐採を止めるため、1990年、91年、92年と来日したが、93年にリオデジャネイロで開かれる先住民会議に行こうとしたところ、空港でマレーシア政府にパスポートを取り上げられたという。2002年に裁判を通してようやくパスポートを取り戻したので、今回の来日が実現したようだ。

サラワクの先住民は、木材伐採のためと伐採後に造られる食品や洗剤に利用するアブラヤシ（パームオイル）のプランテーションのために、土地を奪われ生活基盤が破壊されている。最近では、製紙原料用アカシアプランテーション開発も盛んだ。日本製紙連合会も「平成19年度産業植林適地発掘等に関する調査事業」の「マレーシア国サラワク州におけるパルプ用材植林適地調査報告書」¹（以下、報告書）で現地調査を行い、その報告書8-4では「日本企業による植林実施方法」を検討している。

かつて軍事的に占領した地域を、今度は経済的に侵略することになりはしないだろうか。サラワク州に植林することで、日本の製紙原料もやがて先住民より奪った土地から来ることになるかもしれないという危機意識から、日本がボルネオを占領する以前のサラワクの歴史から現在に至るまでの状況を調べてみた。

1. サラワクの歴史と文化

サラワクはボルネオ島の北部に位置するマレーシア最大の州。1521年、スペインのマゼラン艦隊が現在のブルネイに寄港、1526年にはポルトガル人が入港した。当時、サラワクはブルネイの領土であったが、ブルネイもサラワクもヨーロッパ人の欲しいサトウキビやコーヒーを栽培するには不向きな土地で、無価値と判断されたため占領されることはなかった。

1839年にブルネイ君主は、サラワクにやってきたイギリス人の探検家ジェームズ・ブルックにブルネイで相次ぐ先住民の反乱の鎮圧を依頼、ブルックは沿岸地域に居住していた先住民と協力し鎮圧、褒賞としてサラワクを割譲、ラジャ（藩王）に任じられた。以後、ジェームズ・ブルックとその子孫がイギリスの助けを借りながらサラワクを支配していったという。1941年、太平洋戦争が始まり日本軍が占領するとバイナー・ブルックはオーストラリアに亡命、戦後王位を辞退し、1946年にサラワクをイギリス政府に委譲した。1963年、イギリスから独立しマレーシア連邦に加盟し、現在に至っている。

サラワクの先住民は、沿岸地域に住む人々（マレー族とメラナウ族）と内陸部に住むダヤク（イバン族、ピダコ族、カヤン族、プナン族など）とに大別される。現在、先住民といっているのはこの内陸部のダヤクである。1980年のサラワクの総人口はおよそ123万人、このうちダヤクは約54万人（製紙連合会の報告書によると、現在の人口は231万人、マレー系先住民族は27部族で人口の約半分を占める）。ダヤクの多くは陸稲を作る焼畑農民で、一部は採集・狩猟民族である。精霊信仰²を持ち、ロングハウス³に住み、慣習法（アダット）を遵守している。慣習法制度は、植民地支配のはるか以前から存在しており、すべての家族が土地および森林資源を利用できることを保証していた。拓務省拓務局の『サラワツク王国事情』^{4,5}には「十八世紀後半より和蘭人が「ボルネオ」の商権を獲得し、土民の間では少数の馬來人が最も幅を利かせて、先住民たる「ダイヤ」族を虐待してゐたのである。「ダイヤ」族中陸「ダイヤ」はよく働くが臆病であつて馬來人に虐げられたのは主としてこの陸「ダイヤ」族である（前掲書p.21）と書かれている。この「陸ダイヤ族」がダヤクであり、この記述によってもサラワク先住民は争いを好まない温厚な性格であることがわかる。

イギリスの統治下にあつても、なぜダヤクが精霊信仰や慣習法を維持できたかは、次の3つの理由が考えられる。1つは、到達手段が舟と徒歩、またはヘリコプターによるしかない内陸部までは支配が及びにくかったため、ブルック家やイギリスの統治は沿岸部にとどまったこと。布教に熱心な宣教師にしてもジャングルに分け入るのは決死の覚悟が必要だっただろう。2つめは、統治者が内陸部を占領する価値を見いだせなかったこと。部族ごとに点在して移動しながら暮らしている焼畑農民や狩猟民からわずかばかりの税を取り立てたととしても、リスクや経費の方が大きい。そして3つめはブルックの方針だ。

『サラワツク王国事情』によると、1841年にジェームズ・ブルックが布告した統治方針に以下の文言がある。「五、何人も雖も「ダイヤ」人部落に入り彼等の安寧秩序を紊り又は不正手段を以て物品を取得すべからず」。1934年の第3世「ラジャ」の国民会議での言葉にも「外国資本の流入を仰ぎ、歳入の増加をはかることは代の政策でもなければ先王の政策でもない。若し斯かる政策を採つたとすれば、當領の富源は確に従前より一層擴大するであらうが、富の分散は必然的に領民の福祉を妨害する如き不均衡を示すことゝならう」（前掲書p.47）という部分がある。すなわち、「宗教、慣習、風俗を重んじ、又外國資本の投下は彼等の土地



日本がサラワクを侵略するにあたり調べたと思われる『サラワツク王国事情』⁴（写真右）と占領してからの報告書『英領ボルネオ経済調査第二部 サラワツク王国』（野村合名會社海外事業部、1942年）内容は、製紙連合会の報告書同様、気候や産業、貿易品目など。

を奪ひ、仕事も奪ひ、遂にはその生活をも脅威するものであるから極力避けねばならない」(前掲書 p.48)として、ブルック家は先住民をその生活様式のまま保護しようと努めていたことがわかる。

これらの理由により維持された先住民の伝統的制度は、今まさに崩壊しようとしている。崩壊の原因は、木材伐採と開発であり、その恩恵は、マレーシア政府とサラワク州政府、木材会社、そしてグローバル企業にはあるが、先住民にはない。プランテーション管理者は企業から雇用されたマレー人等であり、プランテーション労働者の多くは先住民ではなく、インドネシアからの出稼ぎ労働者だ。先住民にとり開発は、土地を収奪されることであり、伝統的生活様式や自立的な生活文化の破壊であった。はからずも、外国資本の投下は先住民の生活を脅かすことになるという「ラジャ」の懸念は現実のものとなったのだ。

国防、治安、所得税の徴収などの財政事項と石油資源は連邦政府が直接管轄するが、土地の保有や譲渡、利用と森林資源に関してはサラワク州政府が圧倒的な権限を有することになっている。これはイギリスが植民地返還の際、先住民の意向⁶をくんで州政府の権限を強めたためだといわれている。つまり木材の伐採や輸出は州政府に莫大な利益をもたらすのだ。州政府は先住民の土地の伐採権を伐採会社に販売し利益を得、その後の土地利用も思いのままに行っている。

(次号に続きます) <栗岡>

<注>

1. http://www.jopp.or.jp/research_project/pdf/sarawak2007.pdf
2. 現在は、キリスト教徒も多い。
3. 先住民たちの暮らすロングハウス共同体。アパートの長い列からなる。数十人から数百人が一緒に暮らす。1つの部族が1つのロングハウスで暮らすこともある。土地のローテーションとともにロングハウスも移動する。
4. 拓務省拓務局『サラワツク王国事情(海外拓殖事業調査資料第三十七輯)』1938年。
5. 以後、変換できない旧字体の一部を新字体で表記している。
6. 『脱植民地化とナショナリズム』によると、イギリスとマラヤ両政府の協議により、ボルネオ諸邦の処遇は住民の意識調査を行った後で決定することとされ、意識調査が行われた。